

小唄レビュー

抒情双六 1929(昭和4)年

大正ロマンチズムの旗手であった岩田厚太郎が、世界を舞台にした抒情歌の歌詞に挿絵を添えています。独特の愛い顔の女性が各国の華麗なファッションを身にまとっている。アールヌーヴォー調の絵双六の傑作です。少女時代を過ぎても、ずっと手に置いておきたくなる気持ちがあります。

登場する一五の歌は当時の流行歌「朝鮮国境の歌」「アラビヤの唄」「黒い瞳」「モンパリエ」「流浪の旅」「からたちの花」「森の娘」「君恋」などです。

岩田の挿く女性は、長い睫毛と見事なプロポーションの美人です。この挿絵が当時の少女の異国への憧れを掻き立てたのです。

「モンパリエの娘」のコマ、測つてみたら九頭身もありました！

この双六が作られた年、田中義一内閣が総辞職し、濱口雄幸内閣が成立しました。アメリカでは、フーヴァー大統領の就任後、二十一年の選挙で、特権が大盤落し、世界恐慌の引きとなりました。今年で一世紀の連載を終了します。多くのスゴキアン「双六大好き人間」に多謝感謝です。(一)

少女世界 第12巻 第一 其 附録

小唄レヴュー 抒情双六 案部輯編界世少

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

ジャズの名曲「紐育行進曲」
原曲は1924年発表の「I'm gonna bring a watermelon to my girl tonight」(今夜の娘に西瓜を持ていこう)。軽快で躍動的なジャズです。当時のメロディは、狂騒の20年代と呼ばれ、空前の大繁栄をむかえ、大量生産・大量消費の生活様式が確立し、ラジオ放送やレコードが普及しました。

上りは「波浮の港」
上りは3人の少女が小船の周りに風情あかりに集うコマ。♪波浮の港に、夕陽け小娘けの名詞ですが、作詞家の野口雨情は、たった一枚の写真を見てこの詞を作ったといわれています。じつは波浮の港からは波が夕日は見えないそうです。

振り出しは「出船の港」
振り出しは「出船の港」。柱に寄りかかり遠くを見つめる風情の女性。日本の男性が海外に出るのきっかけである横浜、横浜の歌声が聞かえてきそうです。

画：岩田厚太郎
編集兼発行人：森下岩太郎
印刷所：大明印刷
発行所：博文館
サイズ：縦55mm×横80mm
雑誌「少女世界」月号の付録。
原案：吉田修 写真：熊倉勉

文：監修 吉田修
よしだ・おきむ●1954年生まれ。島根県松江市出身。全国家人情報協会常務理事、NPOキャリア推進ネットワーク広報部長、和文文化教育学会会員を務める。各地で双六部会長として双六の蒐集・研究・制作に取り組む。公式HP＝<http://www.sugoroku.net>

2018

11
NOVEMBER

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
				1	2	3 文化の日
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23 勤労感謝の日	24
25	26	27	28	29	30	